様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２９ 年　 ９ 月　 １ 日現在

機関番号：３４３１５
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2014～2016
課題番号：２６３７０３９１

研究課題名（和文）複数形の前衛観へ：未来派とゲラルド・マローネ関連資料研究

研究課題名（英文）Plural Avant-garde: Futurism and Gherardo Marone

研究代表者
土肥　秀行（DOI, Hideyuki）

立命館大学・文学部・准教授

研究者番号：４０３３４２７１

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,400,000円

研究成果の概要（和文）：第一の成果は、およそ100年前の前衛の横断性と同時性を年頭におきながらも、未来派に「染まった」とされる当時のイタリア内の多様性をみるための南部のマッピングである。次の成果は、イタリア（ローマ大学イタリア文学科「20世紀資料館」、ナポリ国立図書館手稿部門）での調査に加え、3箇所目のブエノスアイレスに眠る資料の調査結果である。最終的な成果として、イタリア現地調査を続けつつ、日本にて資料の分析とまとめを行い、その上で各地の専門家を集めて研究会を開く目標を無事達成できた。2017年2月23日にナポリ東洋大学の会見場で開いた国際シンポジウム「ゲラルド・マローネ文庫：彼の時代1914-24」がそれである。

研究成果の概要（英文）：As the first results of my research, I would like to quote the “mapping” I have made on Avant-garde - mostly southern - movements in a Italy of the Great War years, which is often considered as largely dominated by the futuristic vogue: a mapping that allows us to reflect again on Avant-garde diversity, transversal nature of the Avant-garde. Starting from the investigations I made in Italy - between Rome and Naples, two Gherardo Maroni Funds that keep the author's manuscripts and received letters separately - I could expand the area to Buenos Aires, the third city hosting other materials of Marone. As a final result, I managed to realize, together with other experts of the same matter, an international conference in Naples (“L’archivio Marone e una grande stagione culturale: 1914/24” - The Marone Archive and a great cultural period from 1914 to 1924).

研究分野：人文学

キーワード：前衛　未来派　ナポリ　イタリア　短詩形

１．研究開始当初の背景

(1)研究開始時の 2014 年、国外においては、1909 年 2 月にマリネッティが発表した「未来派宣言」による誕生からちょうど一世紀をむかえた 2009 年をピークに、あらためて未来派は多くの関心を集めている状況にあった。これを再考の機ととらえたむきにおいては、マリネッティら第一世代を核として同心円を描く未来派の既存イメージが、地理と時代に幅のある“futurismi”という複数性を示すものに変化する。つまり従来同様、モザイク模様を示すとされる前衛の図式のなかで単一の未来派像をとらえるのではなく、新たな方針として、未来派としてくくられてきたもののなかに複数性なり多様性なりをみる方針をとる。たとえば *Futurismi*, a cura di C. Rebeschini ed E. Di Martino, Milano, Skira, 2009 といった論集によって示された方向性である。

(2) 研究開始時、国内においては、1992 年のティスダル＝ポッツオーリの展覧会以降、イタリア未来派あるいは前衛について特段新たな展開はみられなかった。限定的に、「ファシズム建築」論として建築についての研究、あるいは太田岳人氏による「第二未来派」の一部についての考察があるだけであった。増殖する未来派像を提示する Hulten の記念碑的な成果（展覧会とカタログ *Futurismo and Futurismi*, Milano, Bompiani, 1986）すら研究動向に反映されていなかった。前衛のはじまりとして、国内外で常に注目される未来派であるが、日本ではうまく研究のアップデートが行われていないことが問題であり、本研究は遅れの挽回としてはじまった。

２．研究の目的

(1) 2014 年まで 3 年間に渡って行った研究活動「20 世紀前半イタリアにおける短詩形：異国趣味と前衛のはざまで」(科研費・若手 B) の結果、前衛の横断性と同時性を導き出せたが、一方、逆に多様性、地域性、時代性といった周縁に生じる「ずれ」が否定し難くたちあらわれてきた。およそ一世紀前の前衛は、グローバルな現象として均質なようでいて実は多種多様である。よってふたたび 3 年かけて、ナポリの前衛の例を通して、後付でも図式的でもない、矛盾と複数性をはらむ前衛像を、歪めることなく、なおかつ批判的にとらえることを目的とする。

(2) 本研究においては 1910 年代半ば以降のイタリア国内の未来派および前衛をめぐる状況の複数性、つまりは地域性に焦点があてられる。特に南部の諸分派が目をひくなかで、ナポリの例は特異と考えられる。というのも、世紀のはじめには文化の中心から周縁へと化していく同都市では、それでも数々の雑誌による文化活動が活況を呈していたからである。そうしたナポリの未来派の発掘研究が 1970 年代末から進められるにつれ、様々な前衛運動一般へと射程は広がった (1990 年代末における研究の例が M. D'Ambrosio, *Futurismo e altre avanguardie*, Napoli, Liguori, 1999)。申請者の研究もその文脈に連なっていくことを目的とする。

３．研究の方法

(1) イタリア各地に分散する、書簡や手稿といった一次資料を扱い、20 世紀初頭の前衛運動における人物間の複雑な関係を再構築する。ナポリ大学、ローマ大学、ボローニャ大学、東京外国語大学の日伊の研究者のネットワークを用い、各方面から助言・協力を得ながら研究を進める。研究成果のアウトプットの機会を、学会年次大会、あるいは専門雑誌に限らず、最終年度の 3 年目には、国際シンポジウムとその論集に求めていく。

(2)【先行研究に関して】
本務校の図書館を通じて、すでに刊行されている書籍や雑誌論文あるいは学位論文といった資料の請求を行っていく。未来派と歴史的前衛に関しては国内大学でも比較的蔵書が充実している。イタリアの国立図書館（フィレンツェ、ローマ)、ボローニャ大学イタリア文学科図書館も資料請求先として積極的に活用する。
【一次資料に関して】
各施設で現地調査を行う必要があり、毎年計 2～4 週間程度の期間実施する。
3 ヶ所にわかれる「マローネ文庫」、すなわちナポリ国立図書館、ローマ大学サピエンツァ校文哲学部、ブエノス・アイレス市ダンテ協会（蔵書の保管先）をまわる。さらにはフィエーゾレのプリモ・コンティ財団、ロヴェレートの MART に赴く。現地調査の際には、在イタリアの研究者との意見交換の場も必ず設ける。
リスクとして考えられるのは、1. 希望する資料が見つからない、2. 研究者に会えない、3. 在外調査に出られない、といったことであるが、1 についてはイタリア現地の協力者に動いてもらい、2 と 3 は予備の調査の機会も設けることで対応していく。
現地調査の難しさは、それぞれの場所で完結していない点にあるが、書簡のやりとりの再構成に関しては、Gherardo Marone a Lionello Fiumi: lettere (1915-1918), a cura di S. Arena, Verona, Della Scala, 2003 の方法と体裁に倣い、重要な文通に関しては一巻毎にまとめ、全体として「叢書」としたい。

(3) イタリア現地調査を続けつつ、日本にて資料の分析とまとめを行う。その上で、申請者が長年研究活動を行い博士号を修めたボローニャ大学にて、各地の専門家を集めて研究会を開く。これはナポリ大学とローマ大学の関係研究者がはじめて集う場となるだろう。というのもお互い相容れない立場にあ

るからだが、あえて「中間地帯」をボローニャにて提供したいと考える。
すべての報告は、すでに申請者が共著を発表した経験のあるナポリの Gaetano Macchiaroli Editore 社より、論集として出版する予定である。

（4）各資料館にある資料収集と整理を行い、相互対照リストとしての目録を作成し、多くの今後の研究のために広く活用されるよう公開する。参考文献表の充実化を常に図り、研究協力者の助言を仰ぐ。
個人 HP、電子メール版ニュースレターなどの時・場所を問わない情報共有の場を作り、さらなる情報を求めていく。
その都度、進捗状況をイタリア語化し、研究協力者との情報の共有を図る。一方向的な情報の提供に偏らせないためである。また論文をイタリアの学術誌に発表することで広く反応を問う。

４．研究成果
（1）成果としてまず挙げられるのは、およそ 100 年前の前衛の横断性と同時性を年頭におきながらも、未来派に「染まった」とされる当時のイタリア内の多様性をみるための南部のマッピングである。既に文化的に後退しつつあった地中海地域が、最後の光を見せる、その様をとらえることも研究の目的としていたが、2014 年度のナポリ調査ではまさに「南の富」（F.カッサーノ）を実感する結果を得た。第一次大戦勃発から１世紀を記念してはじまった事業「文人と戦争」の責任者のひとり、ローマ大学のベルナルディーニ教授にナポリ国立図書館で話を聞く機会を得て、その事業の一翼を担うことになった。2017 年 2 月の国際シンポジウムに結実する共同研究は、ちょうど当研究が具体的な目的としている、各地のマローネ文庫間の相互参照を可能にする目録作成にむけプラス要因となった。というのも当研究従事者・土肥の作業についての了解が、ローマにあるマローネ文庫の責任者でもあるベルナルディーニ教授より、それまで教授と難しい関係にあったナポリにあるマローネ文庫の場において、取り付けられたからである。ローマとナポリの資料館の間の風通しのよい共同作業がようやく可能となり、当研究従事者も関われるような状況になってきた。その第一歩となるのが論文 *Harukichi Shimoi e l'avanguardia napoletana*（下位春吉とナポリの前衛）である。イタリアの国立機関である文化会館の媒体を通して世界に発信されているので、研究協力関係にあるナポリ国立図書館のさらなる信用を得るのに益した。さらに 9 月の招待講演 "Harukichi Shimoi, l'amico giapponese di Gherardo Marone"（下位春吉、ゲラルド・マローネの日本の友人）では、モンテ・サン・ジャコモ村に埋もれているマローネ文庫の有用性をうったえることに成功している。
（2）次に挙げられる成果として、イタリア（ローマ大学イタリア文学科「20 世紀資料館」、ナポリ国立図書館手稿部門）での調査に加え、いよいよ残る 3 箇所目のブエノスアイレスに眠る資料の調査結果がある。調査に先立つ情報蒐集の段階で、ローマ大学博士課程のチェントゥレッリ氏、シエナ外国人大学のアレハンドロ・パタット教授の先行研究と助言は実に示唆的であった。いまから半世紀以上前、1962 年に亡くなったゲラルド・マローネが遺した資料（特に書簡と手稿）は、ブエノスアイレス大学とダンテ協会ブエノスアイレス支部に収められているとされていたが、最も近くまで迫った上記 2 氏でも、結局その存在は確認できていない。2015/8/30-9/5 の一週間のブエノスアイレスの滞在中、ダンテ協会で講演会を催し、マローネを紹介しながら、情報提供を呼びかけたが、あまり有力なものは寄せられなかった。1940 年生の甥のフアン・マローネ氏へのインタビューでは、未亡人デリア（1970 年代に亡くなる）がいかに遺品を処分したかが問題となったが、確認にまでは至らなかった。ただし現地調査で得られた証言や資料は、紀要論文「ゲラルド・マローネとナポリの未来派」（『イタリア語イタリア文学 』(8): 95-117）に反映されている。未見であっても、ブエノスアイレスになにがあるはずなのか、大凡の見当はつくまでになっている。次の調査に役立つ経験となった。続く 12 月のローマ近郊でのシンポジウムでは 20 世紀前衛文学の専門家と意見交換を行うことができた。主テーマは詩人パゾリーニに置かれていたが、彼に先立つ歴史的前衛の世代についての研究者が集っていたのである。年末には 1960 年代の新前衛とも関わりの深い小説家ロベルト・カラッソ氏と講演会を開いた。その後、カラッソ氏の邦訳『カドモスとアルモニアの結婚』の書評（『図書新聞』2016 年 3 月 28 日号）にて、前衛の問題点について触れることができた。

（3）最終的な成果として、予め「研究計画」に記していたように、イタリア現地調査を続けつつ、日本にて資料の分析とまとめを行い、その上で各地の専門家を集めて研究会を開く目標を無事達成できた。2017 年 2 月 23 日にナポリ東洋大学の会見場で開いた国際シンポジウム「ゲラルド・マローネ文庫：彼の時代 1914-24」がそれである。ナポリ大学やバルセロナ大学の専門家たちと有意義な意見・情報交換ができた。目下、このシンポジウムの論文集を準備している。これが世に出てようやく本研究の最終目標である、ナポリとローマとブエノスアイレスの資料館の共同作業が実現したといえるだろう。
2016 年末に刊行された論集『和田忠彦先生退任記念論集』収録の論文では、1940 年代前半のパゾリーニの短詩形に関し新知見を発表

している。
本研究が展開された主たる場のひとつ、ブエノスアイレスのダンテ協会図書館での調査が、シエナ外国人大学における 2017 年 1 月 19-20 日の大型の国際シンポでの発表につながった。南米のイタリア文学研究で現在最も高いレベルにあるアレハンドロ・パタット教授に招待を受けるという名誉に浴した。このシンポの論文集についても現在編集が進められている。
国内でも、伊語にて国際発信性の高い研究発表をすることができた。非常に稀な機会を得た。ここでは、本研究のテーマであるマローネの翻訳業に関わった下位春吉の 1910 年代の活動についてふれることができた。この機会にまとめた論文をイタリアの学会誌に投稿予定である。
今後発表予定のものも含め、論文と研究発表のアウトプットの機会の多い一年であった。研究計画の最終年を飾るにふさわしい活動であったと自負する。こうして、2017 年 4 月開始の「イタリア新前衛派の軌跡と展開に関する総合的研究」（基盤研究 B、研究代表）へとうまくスライドができている。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 8 件）
①. 土肥秀行、「ゲラルド・マローネとナポリの未来派」、『イタリア語イタリア文学第 8 号 長神悟停年記念号』、東京大学大学院人文社会系研究科・文学部南欧語南欧文学研究室、2016、95-117、査読無

②. 土肥秀行、「下位春吉とは何者か／一九三五年の現代日本詩撰―「ファシズム文学」とは」、『日伊文化研究』、依頼有、53 号、2015、2-12、査読有

③. Hideyuki Doi, *Harukichi Shimoi e l'avanguardia napoletana*（下位春吉とナポリの前衛）, *Ricerca, scoperta, innovazione: l'Italia dei saperi*, a cura di Maria Katia Gesuato, Istituto Italiano di Cultura-Tokyo, 2014, 43-51, 査読有

〔学会発表〕（計 10 件）
①. Hideyuki Doi, "L'Archivio Marone in Argentina"（アルゼンチンのマローネ文庫）、国際シンポジウム"L'Archivio Marone e una grande stagione culturale 1914/1924"（「ゲラルド・マローネ文庫：彼の時代 1914-24」）、ナポリ（イタリア）、2017 年 2 月 23 日

②. 土肥秀行、「イタリア・ノヴェチェント再考」中央大学人文科学研究所主催公開研究会、京都市キャンパスプラザ（京都府・京都市）、2016 年 7 月 30 日
③. 土肥秀行、「アルゼンチンのイタリア人―マローネとヴィタ＝フィンツィ」、イタリア研究会第 425 回例会、東京文化会館(東京都･台東区)、2015 年 10 月 30 日

④. Hideyuki Doi, "Harukichi Shimoi, l'amico giapponese di Gherardo Marone"（ゲラルド・マローネの友人、下位春吉）、モンテ・サン・ジャコモ市主催講演会、マローネ邸内市立図書館、モンテ・サン・ジャコモ市(イタリア)、2014 年 9 月 2 日

〔図書〕（計 4 件）
①. 土肥秀行、共編者：山手昌樹、ミネルヴァ書房、『教養のイタリア近現代史』、2017、348

②. 土肥秀行　他、和田忠彦編、ミネルヴァ書房、『イタリア文化 55 のキーワード』、2015、287

③. 土肥秀行　他、青月社、『ノーベル文学賞にもっとも近い作家たち いま読みたい 38 人の素顔と作品』、2014、248

〔産業財産権〕

○出願状況（計 0 件）

○取得状況（計 0 件）

〔その他〕
ホームページ等
http://researchmap.jp/read0146667
http://www.ritsumei.ac.jp/~hidedoi/

６．研究組織
(1)研究代表者
土肥　秀行（DOI, Hideyuki）
立命館大学･文学部･准教授
研究者番号：40334271

(2)研究分担者

(3)連携研究者
和田　忠彦（WADA, Tadahiko）
東京外国語大学･名誉教授
研究者番号： 50158698

石田　聖子（ISHIDA, Satoko）
立命館大学・衣笠総合研究機構・特別研究員
研究者番号： 10795230

(4)研究協力者
マッテオ・ダンブロージオ（Matteo

D’AMBROSIO）
ナポリ大学フェデリコ II 世校・文学部・教授

シルヴィア・ゾッピ・グランピ（Silvia ZOPPI GRAMPI）
ナポリ大学スオルオルソラベニンカーザ校・文学部・准教授

アポッロニア・ストリアーノ（Apollonia STRIANO）
ナポリ大学東洋学院・講師

フランチェスカ・ナポレターノ・ベルナルディーニ（Francesca NAPOLETANO BERNARDINI）
ローマ大学・イタリア文学科・教授

アレッサンドロ・タッデイ（Alessandro TADDEI）
ローマ大学・イタリア文学科・講師

ステファノ・コランジェロ（Stefano COLANGELO）
ボローニャ大学・イタリア文学科・准教授

アレッサンドラ・チェントゥレッリ（Alessandra CENTURELLI）
ダンテ協会ブエノス・アイレス校・講師

ゲラルド・マローネ（Gherardo MARONE）
弁護士

アンドレア・フィオレッティ（Andrea FIORETTI）
東京外国語大学・特定外国語主任教員